行っても入手が不可能だった（いずれも学位論文）。最終的に，入手不可能であった論文を除いた 86 本を分析対象とした。

2. 倫理面への配慮

本研究は，文献レビューのため，倫理面への配慮は必要としない。

C. 研究結果

1. 収集論文の特徴

Figure 1 では，論文の出版年毎に論文数の変化を検討した結果を示した。2000 年前後から論文数は増加傾向にあることが示された。このような傾向は，「化粧」に関する研究などと同様の傾向であった（野澤・沢崎, 2006）。

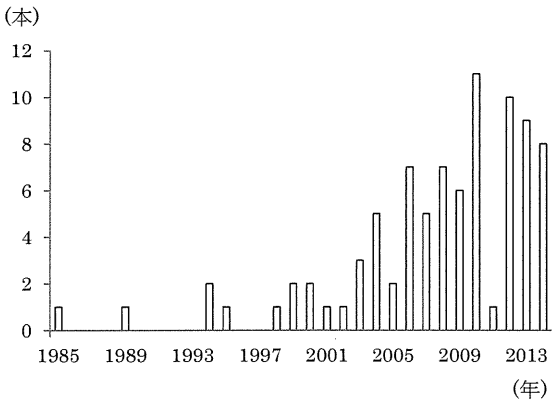


Figure 1. 出版年毎の論文数の推移

研究対象者については，半数以上の論文が乳がん患者を対象としていた（58 本，67.4%）。次に多かったのは，複数の種類のがんを対象とした研究であった（9 本，10.5%）。乳がん以外では，頭頸部がんに関する研究が多かった（8 本，9.3%）。

2. がん治療による外見変化が患者の心理に及ぼす影響について検討した研究

がん治療によって生じた外見変化が患者の心理に及ぼす影響について検討した研究は 66 本（76.7%）あった。このうち，乳がん患者に関する研究が多数を占めていた。

若年の乳がん患者ほど，QOL 低下のリスクが高いと述べる研究が複数認められた（Avis, Crawford, & Manuel, 2005; Chen, Liao, Chen et al., 2011）。若年であるほど，がん治療に伴う苦痛や外見に関する心配が高く，経済的困難を抱えやすいことが示されている（Carver, Smith, Petronis et al., 2006）。

若年であること以外にも，自己評価において外見的魅力を重視する傾向が高い女性ほど，治療による外見変化によって QOL が低下しやすいことが示されている（Moreira & Canavarro, 2010）。さらに，早期の乳がんと診断された 163 名の患者をフォローし，5~13 年後に QOL の測定を行った研究では，化学療法を受けていることと，がんのステージが高いことが外見に関する心配の高さを予測することが明らかにされた（Carver et al., 2006）。

乳がん以外の患者を対象とした研究では，頭頸部がんに関する研究が多かった。口腔がん患者 18 名（男性 13 名，女性 5 名）を対象とした研究では，口腔がん患者が感じている主な問題として，固形物の飲み込み，口渇，開口の制限に加えて，外見に対する懸念や不満が挙げられた（Fierz, Burgin, & Mericske-Stern, 2013）。

頭頸部に関するがん以外について検討を行った研究は少ないが，悪性黒色腫の女性患者 100 名を対象とした研究では，64%が治療後に外見が悪化したと答えており，23%が手術を行った箇所に不満を抱いていたことが示された（Atkinson, Noce, Hay et al., 2013）。診断や治療に伴う心理的苦痛を減少さ

せるために，著者らは手術前の患者への教育の重要性を指摘している(Atkinson et al., 2013)。

3. がん治療によって外見変化が生じ，QOL が低下した患者への介入効果について検討した研究

がん治療に伴う外見変化によってQOL が低下した患者への介入効果を検討した研究は，20 本（23.3%）収集された。

入浴方法が放射線治療による皮膚症状に及ぼす影響について検討した論文では，99 名の乳がん患者を対象として，入浴の際に通常通りに体を洗浄した群（n = 50）と照射部を洗浄しなかった群（n = 49）を比較した（Roy, Fortin, & Larochelle, 2001; Westbury, Hines, Hawkes et al., 2000)。その結果，湿性落屑は非洗浄群で 33%の患者にみられたのに対し，洗浄群では 14%にとどまった（Roy et al., 2000)。皮膚症状，痛み，かゆみの程度については，有意差は示されなかったものの，非洗浄群では洗浄群よりも高い傾向が認められた(Roy et al., 2000)。

クーリングの効果を検討した研究では，266 名の乳がん患者を対象として，頭部冷却を行う群（n = 98）と行わない群（n = 168）に振り分けて検討を行った研究によると，約半数(52%）の患者において，頭部冷却の脱毛予防効果が示され，幸福感も高まる傾向がみられた（van den Hurk, Mols, Vingerhoets et al., 2010)。ところが，頭部冷却の効果が得られなかった患者（48%）では QOL がもっとも低かった（van den Hurk et al., 2010)。また，髪の脱毛は，乳がん患者にとって，もっとも心理的苦痛が強い問題であることが示された（van den Hurk et al., 2010)。

18 名の乳がん，婦人科がん，リンパ腫あるいは白血病，大腸がんなどの女性がん患者を対象として，「外見を良くして気分も良くなるプログラム（Look Better Feel Good Program)」，すなわち，自己イメージの向上を目的として，スキンケアやメイクの仕方について情報提供や練習を行うワークショップの効果を検証した研究によると，ワークショップ実施前に比べて実施後は，患者の自己イメージ，全般的不安，社会的場面に関する回避と懸念が有意に低減したことが示された(Taggart, Ozolins, Hardie et al., 2009)。

これらのことから，心理的介入を実施した研究は未だ少ないものの，医学的介入と心理的介入の両方において，外見変化をきたしたがん患者への有用性が示唆されている。

D. 考察

本研究では，がん治療による外見変化が患者の心理に及ぼす影響と，外見変化をきたした患者の QOL 向上を目的とした介入効果について検討を行った。

がん治療による外見変化が患者の心理に及ぼす影響について検討した研究のレビューを行った結果，外見変化は患者の心理社会的機能の低下に関連していることが示された。とりわけ，乳がんや頭頸部がんの手術による容貌の変化については，多くの研究が行われており，その影響の大きさが伺われる。しかしながら，それ以外のがん患者を対象とした研究はほとんど行われていない。また，QOL やボディイメージ，気分や感情への影響について検討した研究は多いが，外出頻度や対人交流など，日常生活における実際の行動にどのような変化が生じているのかについて検討した研究は非常に少ないことから，今後はこれらの研

究の蓄積が求められる。

がん治療による外見変化によって，QOL が低下した患者を対象に介入を実施した研究のレビューを行った結果，多くは症状の変化に焦点があてられており，補足的な検討として，痛みやかゆみ，QOL などの測定が行わる場合が多かった。

本研究では，症状の変化そのものではなく，あくまでも心理的変化を明らかにすることを目的としたが，広義の QOL には，症状も含まれる。本研究では，症状の変化と心理的変化を明確に区別して検討を行うことはできなかった。QOL は患者の細かな変化をとらえるツールとしては不十分であるといわれているように (Weymuller et al., 2000)，QOL の領域ごとに細かく測定して検討を行うことは有意義であると考えられる。

E. 結論

本研究によって，がん治療に伴う外見変化は患者の QOL を低下させることが示された。そして，外見変化によって QOL が低下した患者への有効な介入が明らかにされた。今後は，乳がん以外のがん患者を対象とした，がん治療による外見変化の影響と外見変化をきたした患者への有効な介入について，さらなる研究の発展が望まれる。

F. 文献

Atkinson TM, Noce NS, Hay J, Rafferty BT, & Brady MS (2013). Illness-related distress in women with clinically localized cutaneous melanoma. Annals of Surgical Oncology, 20, 675-679.

Avis NE, Crawford S, & Manuel J (2005). Quality of life among younger women with breast cancer. Journal of Clinical Oncology, 23 (15), 3322-3330.

Carver C, Smith R, Petronis VM, & Antoni MH (2006). Quality of life among long-term survivors of breast cancer: Different types of antecedents predict different classes of outcomes. Psycho-Oncology, 15, 749-758.

Chen C, Liao M, Chen S, Chan P, & Chen S (2012). Body image and its predictors in breast cancer patients receiving surgery. Cancer Nursing, 35(5), E10-E16.

Fierz J, Burgin W, & Mericske-Stern R (2013). Patients with oral tumors. Research and Science, 123, 180-185.

van den Hurk CJG, Mols F, Vingerhoets AJJ, & Breed WPM (2010). Impact of alopecia and scalp cooling on the well-being of breast cancer patients. Psycho-Oncology, 19, 701-709.

Kinahan KE, Sharp LK, Seidel K, Leisenring W, Didwania A, Lacouture ME, Stovall M, Haryani A, Robison LL, & Krull KR (2012). Scarring, disfigurement, and quality of life in long-term survivors of childhood cancer : a report from the childhood cancer survivor study. Journal of Clinical Oncology, 30, 2466-2473.

野澤桂子・沢崎達夫 (2006). 化粧による臨床心理学的効果に関する研究の動向 目白大学心理学研究 2, 49-63.

Nozawa K, Shimizu C, Kakimoto M, Mizota Y, Yamamoto S, Takahashi Y, Ito A, Izumi H, &

Fujiwara Y (2013). Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. Psycho-Oncology, 22 (9), 2140-2147.
Moreira H & Canavarro MC (2010). A longitudinal study about the body image and psychosocial adjustment of breast cancer patients during the course of the disease. Enropean Journal of Oncology Nursing 14, 263-270.
Roy I, Fortin A, & Larochelle M (2001). The impact of skin washing with water and soap during breast irradiation: A randomized study. Radiotherapy and Oncology 58, 333-339.
Taggart LR, Ozolins L, Hardie H, & Nyhof-Young J (2009). Look good feel better workshops: A "big lift" for women with cancer. Journal of Cancer Education, 24(2), 94-99.
Wallace ML, Harcourt D, Rumsey N, & Foot A (2007). Managing appearance changes resulting from cancer treatment: resilience in adolescent females. Psycho-Oncology, 16, 1019-1027.

G. 健康危険情報

本研究は，文献レビューのため，該当しない。

H. 研究発表

なし

I. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

厚生労働科学研究委託費（革新的がん医療実用化研究事業）
がん治療に伴う皮膚変化の評価方法と標準的ケアの確立に関する研究
委託業務成果報告

治療による皮膚症状とそのケアが患者のQOLに及ぼす影響の検証

担当責任者　鈴木公啓　東京未来大学　こども心理学部

研究要旨

放射線治療および分子標的薬による化学療法治療に伴い，皮膚の様々な症状（放射線皮膚炎）が出現し，患者の身体的ならびに精神的ストレスとなる。さらに，皮膚症状を中心とした外見の変容が精神的ストレスとなり，QOLの低下に繋がることが指摘されている。この点について予防あるいは軽減できれば患者のQOLの向上につながる。しかし，外見変化に伴うQOLの変化については，質的検討などは一部なされているものの，定量性と再現性のある方法による評価は十分にはおこなわれていない。治療に伴う皮膚変化に随伴する自覚的なQOLの変化を経時的に定量化し，今後の予防あるいは介入方法の有用性の基礎データを作成することを目的とした。

研究協力者

矢澤　美香子　武蔵野大学　通信教育部
高橋　恵理子　公立財団法人がん研究振興財団

A. 研究目的

本研究の目的は、放射線治療および分子標的薬投与による皮膚症状の多角的変化に伴うQOLの変化について，QOL指標による測定をおこない，検証することである。

抗がん剤治療や放射線治療に伴う外見の変化は，患者に医療者の想像以上の苦痛をもたらし（(Nozawa, Shimizu, Kakimoto et al., 2013)，長期にわたり心身に大きな影響を与えることも指摘されている（Kinahane et al, 2012）。しかし，治療に伴う外見の変化は致命的なものではないために，長い間軽視されてきた。そのため，治療による外見変化に伴うQOLの変化について，継時的に観察した研究は認められない。機器を用いて皮膚症状を客観的に計測することと同時に，皮膚症状の健常から軽度の異常までの変化に伴いQOLがどのように変化していくかを明らかにすることは，外見変化への予防的介入の時期や適切な対応方法の同定に寄与することが期待される。このことは，患者が治療をしながらも自尊心を保ち，前向きに生活するための具体的なケアに繋がると考えられる。

なお，基本的には研究Iおよび研究IIを担当する他班の協力のもと，研究のプロトコール作成，実施，データの収集がおこなわれる。そのため，実施に関する多くの部分が研究Iおよび研究IIを担当する他班に準ずるものと

なる。

B. 研究方法

1. 対象および実施時期

研究Iおよび研究IIを担当する他班にそれぞれ準ずる。

2. 調査内容

1) フェイスシート（初回のみ）

ⅰ）患者の属性：年齢・婚姻姻状況（既婚か未婚か、パートナーの有無）・就業状況（がん診断時及び現在）・最終学歴・収入：基本的属性の把握およびQOL 関連要因の検討のために実施する。

ⅱ）自己と外見に関する考え方：現在の自己への満足度と外見に対する考え方を測定し，それらがその後のQOL にどのように関連しているか検討するために実施する。

ⅲ）ソーシャルサポートに関する認知：ソーシャルサポートのリソース毎に，どの程度理解とサポートが期待されるか測定し，その後の QOL にどのように関連しているか検討するために用いる。

2) Skindex　29（全回）

皮膚疾患に罹患した者の QOL を評価するための自記式質問紙。30 項目からなる。

オリジナルの項目においては，「皮膚の状態のせいで」という表現が用いられているが，今回の目的に合わせて「皮膚の見た目のせいで」へと表現を改変している。

なお，この改変については，取り扱いをしている iHope International 株式会社に確認し許可を得ている。

3. デザイン

前向き観察研究である。被験者の集団を群分けしてそれぞれ異なる治療方法を行うなど、作為的な行為は行わないため介入研究に該当しない

（介入研究の定義は、厚労省の「臨床研究に関する倫理指針」を参考）。

4. 倫理面への配慮

研究Iおよび研究IIを担当する他班に準ずる。具体的には，以下のとおりである。

1) 患者の保護として本試験に関するすべての研究者は，ヘルシンキ宣言の精神，および「臨床研究に関する倫理指針」（平成 20 年厚生労働省告示第 415 号）に従って本試験を実施する。
2) 各分担研修施設においては国立がん研究センターで作成した実施計画書をもとに，各施設の書式に当てはめ，自施設の倫理委員会の承認を受けた後に実施する。
3) インフォームド・コンセント：適格基準を満たした患者に対して，文書を用いて研究の趣旨，研究の方法を説明し，研究への参加の同意を得る。ただし，研究への参加，途中での辞退は患者の自由意志によることを説明する。また，研究に参加しない場合でも，治療上不利益を与えないことを説明する。本研究では健康被害は想定できないが，万一の健康被害が生じた場合には医療費の自己負担分については患者の負担とすることを説明する。
4) 個人のプライバシーに十分配慮し，個人情報が漏洩しないように匿名化して解析を行う。

C. 研究結果

研究Iおよび研究IIを担当する他班に準じ，研究手法および研究対象の検討がなされ，最終的なプロトコールが作成された。また，国立がん研究センターの倫理委員会の承認に基づき各参加施設の倫理委員会への申請，承認が得られている。なお，各施設の承認が得られたのが平成 26 年 11 月～12 月であることなどから，平成 26 年での対象症例の測定は数が限られているが，今年度内に増加する予定である。

D. 考察

基本的に研究Iおよび研究IIを担当する他班の協力のもと研究が遂行されており，他班の実施状況の影響を大きくうけている。今後も引き続き，順調に実施がおこなわれ，当班の研究も滞りなく進むと想定される。

E. 文献

Nozawa K, Shimizu C, Kakimoto M, Mizota Y, Yamamoto S, Takahashi Y, Ito A, Izumi H, & Fujiwara Y (2013). Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. Psycho-Oncology, 22 (9), 2140-2147.

F. 結論

まだ結論は得られていない。

G. 健康危険情報

現在のところ報告はない。

H. 研究発表

研究の刊行に関する一覧表（学会発表等実績）に記載

I. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

資料：Skindex 29

以下の問いは、ここ１週間で、あなたがもっとも不快に感じた皮膚の状態についてお伺いするものです。
（前半は見た目の状態について，後半は皮膚の状態そのものについてお尋ねします。）
あなたが感じたことにもっともよくあてはまる番号に○をつけて下さい。

ここ1週間で以下のことがどのくらいありましたか。

	まったくなかった	ほとんどなかった	ときどきあった	しばしばあった	いつもそうだった
１．皮膚の見た目のせいで、よく眠れなかった	1	2	3	4	5
２．私の皮膚の見た目は深刻なのかもしれないと心配だった	1	2	3	4	5
３．皮膚の見た目のせいで、仕事や趣味をするのに支障があった	1	2	3	4	5
４．皮膚の見た目のせいで、人とのつきあいがさまたげられた	1	2	3	4	5
５．皮膚の見た目のせいで、ゆううつになった	1	2	3	4	5
６．皮膚の見た目のせいで、家にこもりがちだった	1	2	3	4	5
７．皮膚に跡が残るのではないか、と心配だった	1	2	3	4	5
８．皮膚の見た目のせいで、家族、恋人、友人など大切な人との距離が開いてしまった	1	2	3	4	5
９．自分の皮膚の見た目をひどく恥ずかしいと思い、自分を責める気持ちになった	1	2	3	4	5
10．皮膚の見た目がもっと悪くなるのではないか、と心配だった	1	2	3	4	5
11．皮膚の見た目のせいで、一人で何かをすることが多くなった	1	2	3	4	5
12．自分の皮膚の見た目に、腹が立った	1	2	3	4	5
13．皮膚の見た目のせいで、愛情を表現するのが難しかった	1	2	3	4	5
14．皮膚の見た目に対して薬や治療の副作用が心配になった	1	2	3	4	5
15．皮膚の見た目のせいで、人とのつきあいがうまくいかなかった	1	2	3	4	5
16．自分の皮膚の見た目のせいで恥ずかしい思いをした	1	2	3	4	5
17．自分の皮膚の見た目は、家族、恋人、友人など大切な人たちにとっても問題である	1	2	3	4	5
18．皮膚の見た目のせいでいらいらした	1	2	3	4	5
19．皮膚の見た目のせいで、人といっしょにいたくないと思った	1	2	3	4	5
20．皮膚の見た目のせいで、恥をかいた	1	2	3	4	5
21．皮膚の見た目のせいで、うっとうしく感じた	1	2	3	4	5
22．皮膚の見た目のせいで、性生活に支障があった	1	2	3	4	5
23．皮膚の見た目のせいで、疲れてしまった	1	2	3	4	5
24．皮膚に痛みを感じた	1	2	3	4	5
25．皮膚が焼けるように痛んだり、激しく痛んだりした	1	2	3	4	5
26．皮膚にかゆみを感じた	1	2	3	4	5
27．お風呂に入ったり手を洗ったり、水を使うと皮膚の状態が悪化した	1	2	3	4	5
28．皮膚がぴりぴり、ちくちくした	1	2	3	4	5
29．私は敏感肌だ	1	2	3	4	5
30．皮膚から、出血した	1	2	3	4	5

資料：自己と外見に関する考え方およびソーシャルサポートに関する認知

あなたの考えに最も近いものについてお尋ねします。

・自分自身についてどの程度満足していますか

1. まったく満足していない
2. あまり満足していない
3. やや満足している
4. とても満足している

・治療によりどの程度見た目が変化しましたか

1. とても変化した
2. 変化した
3. やや変化した
4. 変化しなかった

・その変化は想像と比べてどうでしたか

1. 思っていたより変化した
2. 思っていた程度の変化だった
3. 思っていたより変化しなかった

・あなたの病気について周りの人はどのくらい理解してくれていたと思いますか

	まったく理解していなかった	あまり理解していなかった	ある程度理解していた	とても理解していた	知らせていないまたはそのような人がいない
家族	1	2	3	4	0
友人	1	2	3	4	0
知人	1	2	3	4	0
職場の人	1	2	3	4	0

・あなたの病気について周りの人はあなたをどのくらいサポートしてくれたと思いますか

	まったくサポートしなかった	あまりサポートしなかった	ある程度サポートした	とてもサポートした	知らせていないまたはそのような人がいない
家族	1	2	3	4	0
友人	1	2	3	4	0
知人	1	2	3	4	0
職場の人	1	2	3	4	0

厚生労働科学研究委託費（革新的がん医療実用化研究事業）
がん治療に伴う皮膚変化の評価方法と標準的ケアの確立に関する研究
リサーチレジデント成果報告

男性がん患者を対象とした治療に伴う外見変化に関する実態調査

リサーチレジデント　富田　眞紀子　公立財団法人がん研究振興財団

研究要旨

がん治療は患者の身体面だけでなく，心理社会的側面にも大きな影響を及ぼす。がん治療に伴う外見変化によって，患者の心理的不適応や，地域社会や職業生活における人間関係に不利益が生じる原因ともなりうる。しかし，外見変化に関する先行研究や支援活動のほとんどは女性患者を対象としており，男性がん患者が直面する困難の詳細や，情報提供や支援に関する患者ニーズは不明である。これらを明らかにするために，外来受診をする男性がん患者に無記名自記式質問紙調査を実施した。

平成 27 年 1 月に，国立がん研究センター中央病院外来を受診する 20 歳以上の男性がん患者（再来患者に限定）を対象とし，調査票の配布を行った。3 日間で 949 名に配布，855 名（回収率 90.1%）回収し，結果を分析中である。

研究協力者

高橋　都	国立がん研究センターがん対策情報センター がんサバイバーシップ支援研究部
野澤桂子	国立がん研究センター中央病院　アピアランス支援センター
藤間勝子	国立がん研究センター中央病院　アピアランス支援センター
荒井保明	国立がん研究センター中央病院　放射線診断科

A. 研究目的

がん治療は患者の身体面だけでなく，心理社会的側面にも大きな影響を及ぼす。がん治療に伴う外見変化によって，患者の心的苦痛や心理的不適応が生じるだけではなく (Nozawa, Shimizu, Kakimoto et al., 2013)，対人コミュニケーションへの影響を介して（大坊, 2001），地域社会や職業生活における人間関係に不利益が生じる原因となりうる。

このような外見変化は男女を問わず起こりうるが，外見変化に関する先行研究や支援活動のほとんどは女性患者を対象としており，男性がん患者が直面する困難の詳細や，情報提供や支援に関する患者ニーズは明らかではない。特に外見変化の受けとめ方には性差があり，男性患者は外見変化の機能的影響を，女性患者は外見の変化自体を問題にすることが多いと指摘されており (Flexen, Ghazali, Lowe et al., 2012)，男性患者の困難体験を具体的に把握することは重要である。また，男性患者の外的変化は就労場面での困難さに直結し，外見ケアは就労支援の一つともなりうるという側面もある。

このような点から，男性患者の外見変化の有無や外見変化の状況，外見変化と関連する心理社会的問題（社会的困難の程度，心理的well-being，外見変化への価値観）の実態を把握するとともに，患者自身が外見変化にどのように対応しているのか，また，情報・支援ニーズ（必要とする情報や支援，望ましい提供時期，効果的な情報提供者と媒体）や外見変化に関するソーシャルサポートの有無などを明らかにし，今後の支援方法の検討をしていくことが不可欠である。

以上から，外見変化に関する男性がん患者の実態を広く把握するために，外来受診をする男性がん患者に無記名自記式質問紙調査を用いて，次の3点を明らかにすることを目的とする。

1. 外見変化によって男性がん患者が直面する社会的困難の実態（種々の外見変化の有無や苦痛度，社会活動への影響）と関連要因（個人属性，外見への価値観，男性性の認識，支援者の存在の有無など）を明らかにする。
2. 医療者から男性患者への外見変化関連情報の提供実態と，情報への患者満足度を明らかにする。
3. 外見変化に関する男性患者の情報/支援ニーズ（どのような情報を，どのようなタイミングで，誰から/どのような媒体から欲しいか）を明らかにする。

上記の知見から，わが国の男性がん患者の情報/支援ニーズや医療実態に基づいた，効果的な外見ケアのあり方を提言する。

B. 研究方法

1. 対象者

国立がん研究センター中央病院外来を受診する20歳以上の男性がん患者（再来患者に限定）を対象とした。

2. 調査方法

再診受付機で手続きをする再来男性がん患者に，調査員が口頭で調査協力を依頼し，了承した患者に調査票を配布した。

調査票配布場所に調査票回収箱を設置し，回収を行った。

3. 実施期間

平成27年1月8日，13日，14日

4. 調査項目

1) 外見変化の実態に関する項目
外見変化の状況，外見に関する価値観

2) 外見変化に対応する情報に関する項目
外見変化に関する情報入手手段と情報ニーズ，外見変化に関する医療者からの情報提供の有無と満足度

3) 外見変化と関連する心理社会的問題に関する項目
外見変化による心理的苦痛の程度，外見変化が原因で引き起こされた社会的困難の内容対人関係の多さなど社会的困難を引き起こす関連要因，外見に問題のある人の心理的well-being尺度（Derriford Appea-rance Scale (DAS12)）

4) 外見変化への対応とソーシャルサポートに関する項目
外見変化への対応状況，外見変化に関する相談相手の有無
5) 個人属性
年齢，婚姻状況，同居者，学歴，職業，診断名

5. 倫理面への配慮

本研究に関するすべての研究者は，ヘルシンキ宣言（世界医師会）の精神，および「疫学研究に関する倫理指針」（平成 19 年文部科学省・厚生労働省告示第 1 号）に従い，研究実施前には国立がん研究センター研究倫理審査委員会の承認を得た。

インフォームドコンセントについては，調査票配布にあたり，調査の主旨や説明文を調査票表文に記載し，そこには調査は強制ではないこと，拒否した場合も一切の不利益が生じないことを明記し，研究への協力については，調査票の回答・返信をもって，同意取得とした。
また，研究を公表する際は個人を特定できるような情報は一切公表せず，回収された調査票に記載されたデータは統計的に処理・分析し，個人情報保護の徹底を行った。

C. 研究結果

調査票は 949 名に配布，855 名（回収率 90.1%）回収し，結果を分析中である。

D. 考察

本研究は，これまで実態やニーズが不明であった，男性がん患者の外見変化に関して焦点をあて，実際に外来を受診する男性患者を広く対象とした，貴重な調査研究であるといえる。

今後の解析によって，男性がん患者の外見変化に関する実態や，社会的困難に関する関連要因を明確にし，具体的に男性がん患者が抱えている困難感を明確にすると共に，今後必要となるケアや支援についての提言を行う予定である。

E. 結論

本研究は，男性がん患者の外見変化の実態把握，心理社会的問題，情報・支援ニーズなどを明らかにすることを目的としている。調査票調査では，90.1%と高い回収率が得られ，今後の解析によって，より効果的な男性がん患者向け支援教材や医療現場における支援介入プログラムの開発に活用していくことが期待される。

F. 文献

Flexen J, Ghazali N, Lowe D, & Rogers SN (2012). Identifying appearance-related concerns in routine follow-up clinics following treatment for oral and oropharyngeal cancer. Br J Oral Maxillofac Surg, 50 (4), 314-320.

Nozawa K, Shimizu C, Kakimoto M, Mizota Y, Yamamoto S, Takahashi Y, Ito A, Izumi H, & Fujiwara Y (2013). Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. Psycho-Oncology, 22

(9), 2140-2147.
大坊郁夫 (2001). 化粧行動の社会心理学：化粧する人間のこころと行動 (9) 北大路書房.

G. 健康危険情報

現在のところ，健康に危険が生じたという報告はない。

H. 研究発表

なし

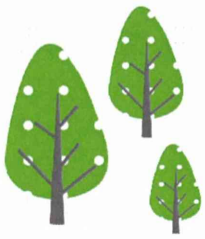
I. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし

2. 実用新案登録
なし

3. その他
なし

治療に伴う外見変化についての無記名アンケート調査



平成 27 年 1 月

国立がん研究センター
中央病院
がん対策情報センター　がんサバイバーシップ支援研究部
中央病院　アピアランス支援センター

《ご記入にあたってのお願い》

◎ この調査は、国立がん研究センターを受診している20歳以上の男性の方に、ご回答をお願いいたします。
◎ ご回答は、あてはまる番号を○印でかこんでください。ご回答に迷う場合は、できるだけ近いものに○印をつけてください。
◎ 「その他」をお答えになった場合は、（　　）内に具体的な内容をご記入ください。
◎ ご記入が終わりましたら、**本日中に１Ｆロビー待合室に設置の回収ポストにご投函ください。**

あなたご自身についてうかがいます

問1　あなたご自身についておうかがいします。差し支えない範囲でお答え下さい。
（平成 27 年 1 月 1 日現在でお答え下さい）

(1)あなたの年齢と婚姻状況をお答えください。

① 年齢　満（　　）歳	②婚姻状況　1　未婚　2　既婚　3　離別・死別

(2)あなたと同居されている方はどなたですか。（○はいくつでも）。

1　ひとり暮らし	4　母親・義母	7　孫
2　妻・パートナー	5　きょうだい	8　その他の親族（　　）
3　父親・義父	6　子ども	9　その他（　　）

(3)あなたが最後にお出になった学校は、次のどれですが（○は１つ）。

1　中学校	3　専門・専修学校	5　大学・大学院
2　高校	4　短大・高専	6　その他（　　）

(4)現在のご職業をお答えください（○は１つ）。

1　フルタイム勤務（会社員／公務員／団体勤務等）	4　無職（定年退職・主夫専業含む）
2　アルバイト／パートタイム勤務	5　その他（　　）
3　自営業／自由業	

問2　(1)あなたは、治療によって生じた外見の変化で、現在（ここ１週間）気にしているところはありますか。普段他人から見られない場所だったり、どんな小さなものでも構いません。（○は１つ）

１　ある　　２　ない

以下(2)以降をお答えください

３ページ問４におすすみください

(2)治療によって変化した外見の中で、あなたが最も気にしている部分はどこですか。
最も気にしている部分を１つだけご記入下さい。
※例：脱毛、皮膚や爪の変化、手術跡、身体の形の変化（ストーマ、ポート、器具の装着、等）

（　　）

問3　あなたの外見上の気になる部分（上記 問１(2)で記入した部分）について、以下の問にお答えください（○はそれぞれ１つずつ）。
外見変化がない場合や、文章の内容自体があてはまらない時は、0(ゼロ)に○をつけてください。

		大変苦痛だ	かなり苦痛だ	苦痛だ	少し苦痛だ	まったく苦痛ではない	外見変化がない／質問内容が自分の状況にあてはまらない
1	自分の気に入った服を着ることができないこと（例：襟のない服）	5	4	3	2	1	0
2	ヘアスタイルを変えることができないこと	5	4	3	2	1	0
3	家の玄関を出て対応することができないこと	5	4	3	2	1	0
4	風のある時に外出できないこと	5	4	3	2	1	0
5	ほかの人があなたの「その部分」について何か言う時	5	4	3	2	1	0

		ほとんどいつも	よくある	ときどき	ほとんどない	外見変化がない／質問内容が自分の状況にあてはまらない
6	私は自分の「その部分」が気になってしまう	4	3	2	1	0
7	友人を作るのは難しい	4	3	2	1	0
8	私は自分の配偶者やパートナーの前で洋服を脱ぐのを避ける	4	3	2	1	0
9	私はレストランやカフェに行くのを避ける	4	3	2	1	0
10	私は家から出るのを避ける	4	3	2	1	0
11	私は「その部分」のせいで、魅力的でないと感じる	4	3	2	1	0
12	私は人前での着替えを避ける（例：公衆浴場）	4	3	2	1	0

ここからは、全ての方がお答えください

治療に伴う身体変化の有無などについてうかがいます

問4　あなたは治療の中で、次のような身体の変化を感じることがありますか。
①外見変化の経験の有無について、あてはまるもの１つに○をつけてください。
次に、②その時の苦痛度について、**外見変化を経験したことがある方は**「最も辛かった時の苦痛度」を、**外見変化を経験したことがない方は**、ご自分が経験したとしたら、どのくらい苦痛だと思うか、をお答えください（○は１つ）。

		①外見変化の有無について			②最も辛かった時の苦痛の程度 ／ 経験したことはないが、自分が経験したら、どのくらい苦痛だと思うか			
		体験したことがない	現在はないが過去に体験している	過去にもあり、現在も体験している	かなり苦痛である	やや苦痛である	あまり苦痛ではない	全く苦痛ではない
脱毛	髪の脱毛	1	2	3	1	2	3	4
	ひげの脱毛	1	2	3	1	2	3	4
	まゆの脱毛	1	2	3	1	2	3	4
	まつ毛の脱毛	1	2	3	1	2	3	4
	体毛の脱毛（陰毛・腋毛も含む）	1	2	3	1	2	3	4
顔	湿疹	1	2	3	1	2	3	4
	しみ・くま	1	2	3	1	2	3	4
	顔の変色（黒ずみ・赤み）	1	2	3	1	2	3	4
	顔のむくみ	1	2	3	1	2	3	4
腕・手	腕の乾燥	1	2	3	1	2	3	4
	手の爪の変色	1	2	3	1	2	3	4
	手の爪の割れ・はがれ	1	2	3	1	2	3	4
	手の皮むけ・割れ	1	2	3	1	2	3	4
	手・指のむくみ	1	2	3	1	2	3	4
足	足の爪の変色	1	2	3	1	2	3	4
	足の爪の割れ・剥がれ	1	2	3	1	2	3	4
	足の皮むけ・割れ	1	2	3	1	2	3	4
	足のむくみ	1	2	3	1	2	3	4
身体全体	体重が増えた（太った）	1	2	3	1	2	3	4
	体重が減った（痩せた）	1	2	3	1	2	3	4
	手術の傷跡	1	2	3	1	2	3	4
	皮膚に湿疹ができやすい	1	2	3	1	2	3	4
	ストーマ（人工膀胱・人工肛門）がついた	1	2	3	1	2	3	4

各項目の「苦痛の程度」についてお答えください

問5　(1)あなたが現在診断を受けている病名について、あてはまる番号に○を付けてください。
（○はいくつでも）。
(2)診断時の年齢を（　　）内にご記入ください。

①病名	②診断時年齢	①病名	②診断時年齢
1　脳腫瘍	（　　）歳	14　膀胱がん	（　　）歳
2　口腔・咽頭がん	（　　）歳	15　腎臓がん	（　　）歳
3　喉頭がん	（　　）歳	16　精巣がん	（　　）歳
4　甲状腺がん	（　　）歳	17　急性白血病	（　　）歳
5　肺がん	（　　）歳	18　慢性白血病	（　　）歳
6　食道がん	（　　）歳	19　悪性リンパ腫	（　　）歳
7　胃がん	（　　）歳	20　多発性骨髄腫	（　　）歳
8　大腸がん（直腸含む）	（　　）歳	21　骨肉腫	（　　）歳
9　肝がん	（　　）歳	22　軟部肉腫	（　　）歳
10　胆がん	（　　）歳	23　胚細胞腫瘍	（　　）歳
11　膵がん	（　　）歳	24　原発不明	（　　）歳
12　皮膚がん	（　　）歳	25　その他	（　　）歳
13　前立腺がん	（　　）歳	（　　）	

問6　外見変化を経験したことで、あなたの日常生活に変化がありましたか（○はいくつでも）。

1　外出の機会が減った
2　人と会うのがおっくうになった
3　仕事に行きたくなくなった
4　人と会う仕事が減った
5　職場の人との人間関係がぎくしゃくした
6　妻・パートナーとの関係がぎくしゃくした
7　子どもとの関係がぎくしゃくした
8　特に日常生活の変化はない
9　外見変化は経験していない
10　その他（　　）

問7　お仕事や生活の状況についてお答えください。
(1)現在のお仕事はどのような分野ですか（○は1つ）。

1　営業職　3　事務職　5　教員・講師　7　その他（　　）
2　銀行員/保険　4　販売/サービス業　6　無職

(2)現在のお仕事や生活で、人と会う機会はどのくらいですか（○は1つ）。

1　とても少ない
2　どちらかといえば少ない
3　どちらかといえば多い
4　とても多い

(3)これまでのお仕事や生活の中で、大変なこと、つらかったことなどについてお聞かせください。

今までの治療期間の中でのできごとやお考えなどについてうかがいます。

問8　あなたは、対外的活動（仕事やボランティア活動、人と会うために外に出る機会）がどのくらいありますか（○は１つ）。

1　週に１日以下	2　週に３日程	3　週に５日程	4　ほぼ毎日

問9　あなたは治療によって、どの程度、ご自分の外見が変化したと感じていますか（○は１つ）。

1　全く変化していない	2　あまり変化していない	3　やや変化している	4　かなり変化している

問10　あなたはご自分の外見の問題に対して、自分が十分に対応できたと思いますか（○は１つ）。

1　全くできなかった	2　あまりできなかった	3　ややできた	4　十分できた

問11　一般に、外見を元気に見せることは、気分をアップさせることに役立つと思いますか（○は１つ）。

1　全くそう思わない	2　どちらかといえばそう思わない	3　どちらかといえばそう思う	4　かなりそう思う

問12　一般に、仕事中に今まで通り装うこと（外見を以前と同じようにみせること）は、重要だと思いますか（○は１つ）。

1　全くそう思わない	2　どちらかといえばそう思わない	3　どちらかといえばそう思う	4　かなりそう思う

問13　一般に、男性は外見を気にするべきではない、と思いますか（○は１つ）。

1　全くそう思わない	2　どちらかといえばそう思わない	3　どちらかといえばそう思う	4　かなりそう思う

問14　一般に、外見は、男性が仕事をする時の評価に影響すると思いますか（○は１つ）。

1　全くそう思わない	2　どちらかといえばそう思わない	3　どちらかといえばそう思う	4　かなりそう思う

問15　(1) あなたは普段、治療によって生じた外見変化に関する情報を、普段どのように得ていますか（○はいくつでも）

1　テレビ	7　家族	13　薬局・ドラッグストアの店員
2　新聞	8　医師	14　特に情報は得ていない
3　雑誌	9　看護師	15　その他
4　インターネット	10　薬剤師	（　　）
5　同じ病気の友人／知人	11　その他の医療スタッフ	
6　友人／知人（5 以外）	12　理美容師	

(2) 治療によって生じた外見変化に関して、**どのような情報が必要**だと思いますか。
具体的にご記入ください。

(3) あなたが入手した情報の中で、治療によって生じた外見変化への対応に**役立ったもの**はありますか。具体的にご記入ください。

問16　(1)治療によって生じる外見変化について、治療開始前に医師や看護師から説明がありましたか。（○は１つ）。

1　あった	2　なかった
以下の問にお答えください	問 17 におすすみください

(2)医師や看護師からの説明はわかりやすかったですか（○は１つ）。

1　とても わかりやすかった	2　どちらかといえば わかりやすかった	3　どちらかといえば わかりにくかった	4　とても わかりにくかった

(3)医師や看護師からの外見変化に関する**情報提供の量**はいかがでしたか（○は１つ）。

1　十分だった	2　どちらかといえば 十分だった	3　どちらかといえば 足りなかった	4　全く 足りなかった

(4)全体として、外見変化に関わる医師や看護師からの説明にどのくらい満足していますか。（○は１つ）

1　とても 満足している	2　どちらかといえば 満足している	3　どちらかといえば 満足していない	4　全く 満足していない

全ての方がお答えください

問17　あなたが、治療によって生じた外見変化について困った時に、相談にのってくれる人はいますか。それは誰ですか（◯はいくつでも）。

1　妻・パートナー	8　その他の家族・親戚	15　その他の医療スタッフ
2　父（義父）	9　同じ病気の友人・知人	16　理美容師
3　母（義母）	10　友人・知人（９以外）	17　薬局・ドラッグストアの店員
4　娘	11　近所の人	18　誰もいない
5　息子	12　医師	19　その他
6　息子の妻（嫁）	13　看護師	（　　）
7　娘の夫（婿）	14　薬剤師	

以上で質問はすべて終了です。ご協力いただき、誠にありがとうございました。

厚生労働科学研究委託費（革新的がん医療実用化研究事業）
がん治療に伴う皮膚変化の評価方法と標準的ケアの確立に関する研究
委託業務成果報告

医療者が実施すべきエビデンスに基づいたピアランスケアに関する患者教育内容の確立に関する研究

担当責任者　飯野　京子　国立看護大学校　成人看護学

研究要旨

がん患者の外見の変化は，多様な要因により生じ，苦痛が強い。本研究グループは，治療前からの効果的なケアを展開することにより治療に伴う外見変化を有する患者へのストレスを緩和することを目的としてプログラム開発を目指している。

本研究課題は，1) 外見ケアに関しての文献検討，2) がん治療を受ける患者の外見変化に対するケアの実態の調査，3) アピアランスに関する医療者向けアンケートの分析，4)　1)～3)通して，がん治療前からの効果的なケアを展開することにより治療に伴う外見変化を有する患者へのストレスを緩和することを目的としてプログラム開発と標準化を試みることを目指している。

文献検討の結果，がん患者の外見変化は多様であること，脱毛を中心に介入研究が報告されていた。今後，文献検討を続けるとともに，ケアの実態調査実施の予定である。

研究協力者

栗原　美穂　国立がん研究センター東病院　看護部
上杉　英生　国立がん研究センター東病院　看護部
市川　智里　国立がん研究センター東病院　看護部
栗原　陽子　国立がん研究センター東病院　看護部
坂本はと恵　国立がん研究センター東病院　サポーティブケアセンター／がん相談支援センター
飯田　郁実　国立がん研究センター中央病院看護部

A. 研究目的

がん患者の外見変化は，治療や病態の進展に伴うもの，長期療養に伴うもの等多岐にわたる。Nozawa, Shimizu, Kakimoto et al. (2013) は，多くの患者は脱毛など外見に関連する副作用に対して苦痛を感じていることを報告している。

特に，治療に伴う変化は急激で，身体的にも心理的にも社会的にも困難を感じ，女性の社会的な活動に影響を与え（Rosman, 2004），社会的孤立を生じることが報告されている（Lazwll-Ali, 2007）。

外見の変化に対するケアは，変化する前からの継続した関わりが重要であるものの，医療者の初期アセスメントがしばしば遅れ，患者の苦痛に関して気づかれていないことが報告されている（McDonald et al.,1999）。こ